

# デジタル・防災技術ワーキンググループ 社会実装チーム (第6回) 議事要旨

## 1. 日時

令和3年5月12日(水) 10:00~12:20

## 2. 出席者

喜連川座長、池内委員、臼田委員、小池委員(五十音順)

関係省庁〔内閣府(経済社会システム担当)、内閣府(科学技術・イノベーション担当)、内閣官房(情報通信技術(IT)総合戦略室)、総務省(大臣官房企画課)、総務省(自治行政局 住民制度課 デジタル基盤推進室)、消防庁(国民保護・防災部 防災課)

赤澤副大臣、青柳政策統括官(防災担当)、村手官房審議官(防災担当)、内田官房審議官(防災担当)〕

## 3. 議題

(1) 開会挨拶

(2) デジタル・防災技術ワーキンググループ(社会実装チーム) 提言 骨子案について説明

(3) 質疑・意見交換

(4) 閉会

## 4. 議事要旨

冒頭、赤澤副大臣から、「デジタル改革関連法成立等で直ちに可能となる生命を守る災害対応力の飛躍的向上により、人命最優先のデジタル防災を社会実装することで、救命・救助、災害関連死の防止を促進することを目指す」「本日は、次回の提言とりまとめに向けて、提言の骨子案について御議論をお願いしたい」旨の挨拶があった。

続いて、「デジタル・防災技術ワーキンググループ(社会実装チーム) 提言 骨子案」の概略について事務局からの説明があった。その後、以下の意見等があった。

○デジタル・防災技術WGなので、システムのイメージは打ち出したい。骨子案では、総合防災情報システムに、SIP4Dで得られた知見を付加し、開発するという説明とすべき。理由としては、総合防災情報システムは365日24時間対応で動いており、SIP4Dとは作り方が根源的に違っている。加えて、機能を足してきてシステムが継ぎ継ぎの状態になってきている可能性が高い。また、ITシステムは、メンテをやっているかいなかで大きくパワーが違い、IT技術の進化も早いので、システムそのものを進化させたい。他方で、動いているシステムを作り直す判断は非常に難しい。現状では定量感を持っておらず、実務の意向を聞きながら進めていきたい。

○亡くなった人の現場の情報は、現状でデータがどこまで収集できているか分からない。今後

- ついても、実際には市町村・警察が生情報を収集することになると思うが、物理的に収集できるかと収集してもらう理由を立てられるかは、研究・検討していかないと道筋が見えない。
- IT システムを考えると、今できるかどうかでなく5年先をデザインし、ここに持つていくために何をしなければいけないだろうという発想になる。今どのように調整するかということとは独立に考えたい。
  - 多くの学会が山のようにあるが、全医科領域を横断的に共通のカルテフォーマットまで決めたことはすごいこと。プラットフォームの中に医療系のものを入れ込むみたいなイメージ感を出すというのはすごく新機軸に見えると思う。
  - EMIS について書くのだったら消防のシステムや救急のシステムを書かないとつながらないと思う。人命最優先のために道路がどうなっているかという情報としては、国交省や警察庁のシステムを同じように書く必要がある。人命最優先に向けて、個別の府省庁で保有、運用しているシステムを進化させるための開発の体制づくりを進める等、骨子案に書いていないシステムも対象になるということをやうまく入れたい。
  - 災害時の各段階で、亡くなった原因を分析する必要がある。救助活動の段階で救助すべき人を捜せなくて亡くなっている場合と、救助した人を病院に搬送する段階でトラブルが発生して亡くなっている場合と、病院に搬送した後の段階で病院側の人員・資機材が不足して十分な医療行為が行えずに亡くなっている場合など、各段階で亡くなる原因が異なっている可能性がある。人命救助の各段階で人命を守るために隘路になっている事柄に関する情報をきちんと整理することが必要。
  - 亡くなった方の記録はないのが現状。そのため現存するデータはどういうものがある、どういふものが必要かそこをしっかりと調査検討する必要がある。
  - 学理に基づく研究開発の成果が実運用の中に実装的に取り込まれる仕組みが必要。
  - 進化というのがキーワードで、開発するシステムは進化するデジタル技術を適宜埋め込みやすい仕組みとしたい。運用においても常々改修検討を行うような体制と手順を定めて、5年から7年に1回というペースではなくて、毎年常に新しいデジタル技術を取り込むことが重要。
  - 電力・通信の確保についても記載した方がよい。
  - いかに市町村を支援するかが重要で、そのためにトレーニングの枠組みと情報の枠組みを連接させて、防災対応力の向上を図ることが必要。
  - マクドナルドはピープルビジネスでたまたまハンバーガーを売っている。マニュアルとトレーニングによるチーム連携、人とのつながりができている。一方、災害時のマニュアルを超えた非常時行動をモデルートしていくことが重要だが非常に難しい。
  - マニュアルでトレーニングしていても、そうでないことが起きる。行動と知識と心理のプロセスがカバーできるシステムづくり、SIP4D や DIAS を基に行動できる人間の支援が必要。
  - 最初のパラグラフは重要なので、人命を守る対応が必要とされているということを強い調子で記載すべき。また、新しい情報集約システムの構築・活用体制の概要は修正が必要。ヒヤリハットを含めた災害対応の失敗事例や亡くなった方の死因や被災状況等に関する情報の収集・データベース化も「望ましい」ではなく「必須」にするべき。
  - 災害が起こるたびに毎回ちゃんと反省して、それをどうデジタルのシステムにしていくかを検討していくということはずごく国民に通じやすい。
  - メッセージが一番強く表されるのは具体例。こんな命が失われている。だからこうすべきではないかと。つらいところを前面に出して、我々はこれを直したいと。DMAT と一緒になってこれを絶対に直すというメッセージ的なシナリオを書くべき。
  - 解決の方向性で示したことで、課題で示したほうがいいこともある。例えば、情報をデータ

- で共有するためのムードになっていない等は課題。また、デジタル技術は進化も陳腐化も速いものにもかかわらず、実務のほうの取り入れのサイクルに時間がかかる等も課題に入れられる。
- 方向性にもう少し具体感を入れて、課題はあまり一個一個個別にせず、大きくりに提示するほうがいい。
  - 防災技術は確実にエクスポータブルであり、諸外国が買わざるを得ない技術であり、国富の源泉に確実になる。
  - 防災・減災が成長戦略に繋がっていくということは重要なメッセージである。
  - 災害診療記録は共有できるようにしたほうがいい。
  - 全体としてとにかく進化の激しいデジタル技術に対して、どうやってそれをいかに早く防災に取り込むか。実務で困っていることが何なのかということがすぐ研究に生かされ、研究で生まれた技術がすぐに実務に生かされるような、まさに防災デジタル技術のエコシステムみたいなものがしっかりこれから作っていくべき。